

床に座る十数人の子どもたちは、物語がクワイマックスに近づくと食い入るように真剣な目で読み手のおねえさんを見詰める。よちよち歩きの一歳の子から小学生まで、お気に入りの場面は共通しているようだ。

イトーヨーカ堂赤坂店の子ども図書館。毎夕四時から始まる絵本の読み聞かせ会は、近隣の子どもたちにつきり気に入られている。本を借り出すために図書館に名前を登録している親子は一万四千人あまり。貸し出しは無料。開館して五年半だが、今では半ば地域の公共施設のような存在になっている。

に及ぶ。閉館しようとしたが反対の署名活動が起きて存続を決めた店もある。子どもの活字離れは、ここには無縁の話だ。繁盛の秘密は運営を委託されている出版社、童話屋（本社東京）の方針にある。例をばこ

中外時評



悲惨な文化行政の貧困

民間子ども図書館が語るもの

論説委員 吉野 源太郎

そして最も大切なのが本と子どもの間をつなぐ司書である。安城店で絵本を讀むおねえさんは萩田玲子さん。司書の資格を持つ童話屋の社員だ。

は、技術革新がもたらした今日の情報の氾濫（はんらん）の中で、とかく見失われがちな素朴な視点の確かさを教えている。情報化が文化の混迷をもたらすなど言われるのは、あるいは日本独特の現象かもしれない

から文化面で富の還元を求められ、税制がそれを支える。寄付の対象に図書館が選ばれたのは米国では不思議なことではない。情報の蓄積、媒介、伝達手段は今日こそ産業としての成長分野となったが、それは

次に、それら子どもたちが読みたくなるように並べる。絵本は背の低い書棚に表紙が見えるように置く。背表紙だけでは子どもは中身を判別できない。

くれば、と思っています」図書館の役割に関する萩田さんの説明は簡潔に核心をついている。どんな情報をも伝えるか—そこに責任をもとうとすることは文化を創造する行為にほかならない。萩田さんの言葉

い。マイクロソフト社のビル・ゲイツ氏が図書館支援財団を作ったとき、米国ではそれに違和感を持つ国民は少なかった。鉄鋼王者カーネギーはかつて自ら設立した財団を通じて二千八百の図書館を作った。成功者は国民

ハイウェイ構想の中でも図書館は重要な地位を占めていたし、司書は高度な専門家とされ、児童図書担当者は教育にかかわる特別職として尊敬されている。それに比べ、日本の現状は悲惨だ。図書館を持つ町村は三分の一にすぎず、司書のいない公立図書館は少しも珍しくない。貧しい現状にさらに予算削減のなすが振るわれる。大正大学の中多泰子教授によると、図書館職員に占める児童図書担当者割合は、九〇年代半ば以降だけで四分の一に激減した。こうした現状を放置して子どもたちの活字離れ対策を論じることなど無意味だ。中多教授は嘆く。

めるといって薄っぺらな情報教育。貸し出し冊数の実績をつくるためにやたらに児童コーナーの漫画を増やす子ども不在の公立図書館。根底にあるのは覆いがたい文化の貧困である。しかし、健闘するヨーカ堂図書館も近い将来まで存続が約束されているわけではない。なにしろ一円の収益も生まない活動だ。「それでもあくまで営業活動の中でこれを維持しているのだから確かに限界はあります」と水越さくえヨーカ堂常務も苦しそうに言う。経費削減を求められる童話屋の苦悩も深まる。ヨーカ堂はカーネギーでもマイクロソフトでもない。図書館は一例にすぎない。担い手のない日本の文化活動の将来は霧の中にかすんでいる。